第２回（仮称）札幌市森林基本方針策定に関する有識者会議（柿澤委員）議事録

日　時：令和４年６月６日（月）１５：００～１７：００
場　所：北海道大学農学部
委　員：柿澤委員
札幌市：上田自然緑地係長、久保職員

＝第４章＝
【上田係長】（第４章説明）
【柿澤委員】持続可能な経営管理のところで、手段が先に来ていて、経営計画制度や森林経営管理法をどうやって使うのかという形からになってしまっているような気がする。札幌市として、人工林経営をどの辺でどのくらいできそうか、公益的機能の観点から、間伐等含めて整備しなければならない森林がどこにどのくらいあるのかとか、全体的な森林整備の基本的な方針をはっきりさせる。そしてそれを進めるために、人工林であれば、経営計画制度に基づいて計画の策定に取り組んでいくだとか、それ以外のところで整備が必要なところで、小規模でなかなか進みそうにないところに関して、経営管理制度を使ってという構成がよいのではないか。。
　札幌市として、森林整備をどうしていきたいのか、あるいは市民として森林にどのように手を入れていかなればという要望があって、それで、この制度を使って・・という繋がりがあったほうがいいのでは。
　フロー図のほうがそのような形になっていると思う。どんなことを整備方針にしたらよいか、それについて今ある制度がどんなものなのかとか。制度の隙間があれば、どんな風な取り組みが必要だとか、そういう形の提示をしていったほうが、札幌市としてできることがはっきりするのかな、と思った。
【上田係長】その通りだと思う。修正したい。
【柿澤委員】経営計画だとか集積計画だとか、どれくらいできるか。たぶん、そんなにできないのではないか。集積計画立てるのも相当大変だし、経営計画も大手所有者は大体作っていると思うので、そうではないところの経営計画を作ってくれそうなところがどれくらいあるか。たぶん、こういう計画を作るとなると、数値目標などをどうしても作らざるを得なくなる？
【上田係長】今回は方針なので、数値目標まで作らない予定。
【柿澤委員】優先順位をつけて、札幌市としてどのくらい計画を作っていくのか、ということを考える必要があり、また実際に森林組合と札幌市で取り組みきれないという場合は、そ

のギャップをどうやって埋めるのかということを考えなければならない可能性もでてくるかもしれない。
　今すぐ、どうにかしなきゃ、どうにもならないという話ではないとは思うが、一般の方々も含めてどれくらい必要性があって、どのくらいの速度感で、どのような形で取り組むのか、というのがなんとなく見えたほうがいいのでは。ゆっくりでもいいと思う。すぐに進めるのは難しいから、優先順位をつけてこういうところを先にやって、そうじゃないところはしばらく置いておいても大丈夫そうなところは、置いておくとか。
　議論の仕方はいろいろあると思うが、ただ、どれくらいをどうするのかという目途はあったほうがいいかなと。
【上田係長】森林組合による経営計画が一番望ましいが策定には限りがある。そうなると、経営管理制度が主たるところなのかと思いつつも、どれくらいのスピードでということになるとマンパワー的に全然進まない、というのが正直ある。仮にマンパワーがつけば、経営管理制度が主体になるのかなと思う。
この章の構成として、全体の方針があって、そしてツールがあって、という書き方にしたい。確かに前段の部分が抜けているので、そこをわかりやすく記載しようと思う。

【上田係長】経営管理制度の取組について、他の都市などと比較すると~~は~~どうか？
【柿澤委員】札幌市はまじめに取り組んでいる都市だと思う。他の都市では、秩父市みたいに、本格的に人工林経営を、これをきっかけに進めるというところや、飛騨市みたいに広葉樹の森づくりを有効活用しようと考えて、広葉樹施業をしやすいところを狙って集めて、市がやりたい広葉樹施業をやるという、戦略的にやりたいことを進めるためにこれ（経営管理制度）を使っているというところが多く、札幌市もそのほうが良いのでは。
　かたはしから意向を聞いてきますという風にやると、どうしようもなくなってしまうので、札幌市がとりあえずこれだけやります、というところを、やれそうなところから少しずつ実績を積んでいくのがよいのでは。
【上田係長】そういう意味では、真面目かもしれない。
【柿澤委員】あまり、経営管理システムに真面目に付き合うというより、札幌市がやるべきことをやるために使うように考えたほうが良い思う。
【上田係長】これまで全然森林整備をしてこなかったので、急にお金も来て、法律もできたのでやらなきゃ、という意識がある。
【柿澤委員】森林環境譲与税と森林経営管理システムは別のもの。つながっているような説明をなんとなくしているが、法律的には全然つながっていない。
【上田係長】経営計画があまりできないから、経営管理制度を進めなきゃいけない。でも数を減らさなきゃと考えている。私の主観だが、我々がやりたいことは、どちらかというと市

有林の活用で進めていくべきと考えている。いろんなことができそうであるし、道内にも波及しそうなので。
【柿澤委員】市有林も力を入れるのと同時に、個人の所有者や会社の森林も整備しなきゃならないと思うので、戦略的に札幌市としてどこらへんに手を付けなければならないのか、ということや、どの辺が何とかなりそうかということを合わせながら考えるべきでは。
【上田係長】都市近郊なので、災害防止機能的なことが大きいかと考える。川に近くて傾斜がある箇所などを重点的にやらなきゃならないのかなと。森の奥のほうは優先順位が低くなると思う。
【柿澤委員】熊対策や野生動物対策など、土砂抑止など災害防止と人間が生活する空間の緩衝帯などを合わせて整備するとか、思い付きだが、そういう形でできそうなところでやるのもよいのでは。
　市有林も、林齢の平準化なども、皆伐一斉造林でやっていく場所があってもいいし、高齢化を進めていって、択伐でもいい。平準化のために皆伐で置き換えていくというやりかたは、人工林といえどもとる必要はないのでは。「齢級構成平準化」や「産出が必要になる場合に備えて」まで考えなくてもいいのでは。木材としてあればいいので。皆伐再造林を白旗山でやる必要は必ずしもないので、白旗山に適した方法で。手入れ不足で間伐遅れの場合は、高齢化できない場合もあるので、若返りを図ったほうがいいのかもしれないが、必ずしも平準化しなきゃいけないと市有林の中で考えてなくてもいいのでは。
【上田係長】この平準化という記載は、行政としての意義というか、市有林だからこそできるところかなと考えていた。私有林であれば、材が高いときに全部売ってしまって、いざというときにないという事態になりかねない。行政の森林であれば、今、材が高いからたくさん売るぞとならないで、少量ではあっても一定の木材を出せますよ、ということが存在意義かなというところで、記載したので少し違和感があるかもしれない。
【柿澤委員】そうであれば、どちらかというと民有林が皆伐再造林が動いているので、札幌市は高齢級、皆伐をしない、皆伐再造林をすると費用が掛かるので、公的な所有であれば、高齢級化して択伐しながら、小さい若い木から太い木までいろんな材を出せるような森林をつくるのがよいのでは。公益的な機能や生物多様性の面でも優れていて、なおかつ地元のいろいろな要求に、小さい材から太い材までいろいろな要求にこたえられる山づくり、そっちのほうが、意義があるのではないか。
【上田係長】長伐期化的なものは私有林ではそんなに行われない？
【柿澤委員】篤林家と呼ばれている人たちがそういう風な森づくりにしようとしている人もいるが、一般的には皆伐して再造林して回す。公的な森林管理としてのメリットを出していくという面でいうと、そういう道を探っていくというのはありうるかも。私は施業が専門じゃないので、専門としている方、石橋委員にきいてみるとよいと思う。

＝第５章＝
【柿澤委員】担い手のことに関しては、担い手いわゆるプロとボランティアだとか、普及啓発だとかが結構混ざって書かれているのでは。企業ＣＳＲ活動の取り組みだとか、大学や研究機関との連携だとかは、担い手なのか、普及啓発なのか。ボランティアの手入れは量的には本当に限られているので、その辺を並べないで。ボランティアに関しては自分たちの活動フィールドをもってやってもらうだとか、白旗山中の一部分もあるかもしれないが、普及啓発として月に一回でも実際に山に入って体験をしてもらうことを通じて、森や木材の理解を深めてもらうというような。プロの人たちをいかに育てるのと分けたほうがいいのかな。
担い手のところも、たぶん、さきほどの森づくりの方針と実際に担う人が関係してきて、一般的な人工林の間伐だとかを進めていくのであれば、森林組合や一般の林業者の人たちである程度量をかせぐし。小別沢のようなこまやかな森林管理をしたいときは、自伐型を活用するだとか。そういうことをしながら担い手を育成するだとか。
森づくりとどういう事業体なり自伐型なりを育成するのかというのを結び付けていったほうがいいのかなと。そのほうが、様々な発注の仕方というのも、双方やりやすくなるのでは。
池田町で、地域おこし協力隊を雇って、整備する森林を自分のフィールドにして、環境教育だとか半林半Ｘで、そこの森林を将来的に広葉樹施業をしていってもらう、という任せられる人材を育てていく。林業だけでは食べていけないので、3年間地域おこし協力隊みたいなものをやって、ほかの関係などもやりながら、そこの森林の「おもり」をしていけるような人を育てる。そういう形で市町村有林を使って自伐型の人たちを育てるということは、けっこう色んな市町村でやっているんで、市有林の使い方としてはそういう使い方というのもあるのかもしれない。
【上田係長】地域おこし隊とは、林業事業者とかではなくて、普通の方々か。
【柿澤委員】ある程度経験を持っている人もいるが、全然経験はない人もいて、もちろん指導をする人がいて、そこで自伐型林業みたいなことを地域でなんとか展開できるように自立をしていこう、みたいなことをいくつか町村なんかでやっている。
【上田係長】森林の、それぞれの整備をする中でどういった事業者さんができるんだろうか、やれるんだろうか、適しているのだろうかみたいなことを紐づけながら考えていって、もうちょっと具体的に考えたい。育成という面でも考えた方がいいかもしれない。
【柿澤委員】とある方のグループの人はネットワークを広げようとしている。そういう力を借りるというのはありえると思うので。

【柿澤委員】札幌市の森林組合さんに対して、北森カレッジあたりから、プランナーみたいな人達も含めて育成するような研修などをやって支援してもらうとか考えられるかもしれ

ない。北森ははじまったばかりなので余力ないのかもしれないけど、例えば豊田市では岐阜県立森林アカデミーと連携して、森林組合の施業プランナー育成の独自プログラムを走らせているということがある。北森カレッジの卒業生を雇用して、継続的な人材育成に北森カレッジに関わってもらうようにしてプランナーとして具体的にいろいろな形でやっていこうかという指導・研修というか、そのようなものをしてもらえるような機会があるといいですよね。別に北森カレッジに限らなくてもよいのですけど、どこかにプランナーの人として自立して活動できるような研修をするといったことがあったらよいと思う。たぶん森林組合は今まで札幌市の仕事がほとんどで、プランナー的な経験をもつ方ってほとんどない方と思うので。
【久保職員】今、既存の森林施業プランナーの中で資格的なものがあるが、それはけっこう時間がかかるか。
【柿澤委員】最近は施業プランナー研修みたいなものはあるが、実務経験がさらに必要。
【久保職員】１～２週間空ける必要があり受講が難しかったというのを聞きました。
【柿澤委員】1週間空けるとなるとなかなか難しい。先ほど述べたようなコンサル的なものを頼んで業務をしながら研修という仕組みなどをつくらないと難しいかもしれない。

【上田係長】さっきのボランティアと CSR のところは、担い手というか啓発か？
【柿澤委員】ボランティアは担い手かもしれないけど。両方かかわってくるはず。
【上田係長】確かに毛色が違うので分けたほうがいいかもしれない。「森林活動」など。
【柿澤委員】ＣＳＲはどちらかというと広報と啓発。ボランティアのほうは、担い手は担い手なんだけれども、プロと違って量的にはどれだけ実際に森林整備にかかわれるかというところに限界があり、またボランティア活動自身が普及啓発的な意味合いも持っているので。
【上田係長】章を増やしてもいいかもしれない。第 6 章の地域材利用に地域材利用と普及啓発としたんですが、森林の普及啓発も入っているので、若干違和感はあった。「担い手育成とスマート林業」があって「木材利用」があって「普及啓発と森林活動」みたいな、そういう章分けがあってもいいかもしれない。

＝第 6 章＝
【柿澤委員】地域材利用について言うと、一般建築物については、港区モデルというのがあって、建物の内装材だとか建物の平方メートルあたり最低どのくらいという木材利用ということをして、なおかつ市町村など木材を供給してくれるところと連携協定を結んで、こういうところがありますよと紹介してあげるということをしている。ハウスメーカーに働きかけというのは難しいかもしれない。
【上田係長】民間建築物に対しての支援に関する要望はすごくいただいている。ただ、具体

的に何すればいいかと悩ましい。
【柿澤委員】情報提供とか。関係団体と一緒にアイデアだししてもらってやらないとちょっと難しいかもしれない。道経連も木材利用に関する提言を作成しようとしているし、道木連も動いている。札幌市単独でやるのは難しいので、そういった木材関連団体や、経済団体と経営者などと考えていったほうがいいかもしれない。
【柿澤委員】木材利用に関しては、バイオマス利用が一番やりやすい。どんな材でもいいし、加工施設がなくていいので。
　札幌市内で薪ストーブ使う人が結構多いので。そうなってくると、白旗山からもってくるのがいいのかわかならいが、色々なプログラムで、森林整備と薪が欲しい人と、雑木林を手入れするのをどうするのか、というのを結びつけることも考えられる。木材利用という点で技術だとか、加工施設だとかがなしですぐに取り組めるので、薪は面白いのでは。結構いろいろなところで取り組んでいる例もあると思うので。
　市産材の地産地消は、ニッチ的な利用になってくるのではないか。白旗山とか小別沢とか、量は稼げないにしても、普及啓発だとかマスコミ、一般の方へインパクトがあるところ場所で、使っていくことを考えたほうがいいかなと思う。
　ソフト的なところでは、「森林サービス産業」をやり始めているので、面白い取り組みを情報収集をしてみるとよいのでは。札幌市で全部やらなくても、民間の団体に白旗山の中などで、プログラム利用などをしてもらうとか。森林の整備というところだけではなくて、ソフトだとか森林を楽しむ部分を導入する部分でいうのも考えていかないと。普通の人は散策するぐらいで、森に親しんでくださいと言っても自分たちだけでは難しいので、こういうプログラムでどうですか？とか。森のこと知りませんか？など、こういうプログラムがあると、よりフィールドを使ってもらえるし、市民との距離感も縮まるのではないかと。

＝第８章＝
【柿澤委員】白旗山の章は今までのものを全部うまく繋げたようなかんじですね。白旗山だけでなく、モデル的なところがあと１～２か所あってもいいのでは。市有林でやるところと、今やり始めている小別沢など地域社会や所有者だとか、小別沢に集まってくるいろいろな人たちだとかがかかわって、全部つながってくる可能性があります。また、人工林経営的なところでもあってもいいのでは。経営計画だとか、集積ができるところとか。小別沢のような里地里山的な地域社会とかかわりがあるところと、もうちょっと林業的なところで、まとまりのあるモデル的なものを作ったら、よりうまく繋ぎが見えてきて・・
【上田係長】私有林はあまり考えたことがなかった。
【久保職員】最近、社有林を PR しようとしている企業もあるので、そういう面ではそこらへんも考えたほうがいいかもしれない。

【上田係長】大企業のところのほうがやりやすいのかもしれない。確かに、最初に委員がおっしゃっていた「森林で何がしていきたいのか」というところにつながっていくのかもしれない。私有林でどういう風にしていきたいのか、それを実践するうえで、まずは大企業さんのほうで、一緒にやっていきましょうなのか、協力お願いしますなのか。じゃあそれをもっと個別に移していきましょうと。２０年後にはもう少し経営計画ができているはずだから、効果はあると思う。
【柿澤委員】もう一つ、小別沢が、あそこなら地域社会や近隣の人たちだとかと、里地の農業と関連しているので、ああいう里地里山的なところでまた一つモデル的な地区になるかと。もっと雑木林的な森林ボランティアが使えるような里山に近いところが結構あるので。小別沢をモデルにしながら、他のところでも応用できるとよい。

【柿澤委員】白旗山の簡易製材機などは、結構大事かなと。市内で加工施設がないので、市内で出てきた材を近くで使えるようなところがあるのは、重要だと思う。札幌市の中で材を使うにしても、札幌市から一回どこか市外へもっていって、またもってこないといけないので。簡易的なものであればここでできるというのは、人の目に触れるという点でもよいと思う。
【上田係長】構造材のようなシビアなものは難しいかもしれないが、内装材とかベンチとか簡易的な用途であればいいかと。行政の負担にならないように、ＰＦＩを使って任せるような形であれば可能だと考える。川上から川下からある程度色々工夫してできるグループ企業等であれば、材を出してきて、加工して、それを出して・・ということを一連でできるのではないかなと。白旗山にはスペースもあるし、譲与税を活用する方向でいけば、普及啓発の効果は高いと思う。先日、佐々木委員のところで話を聞いた際に、天然乾燥を研究しているようなので、乾燥機が難しいのであれば、白旗山は広いので、天然乾燥ベースでやっていくというのもありかと。

＝第７章＝
【柿澤委員】市民の森の廃止は、所有者との関係が大丈夫そうなら、大丈夫だと思われる。

＝その他＝
【上田係長】タイトルの話だが、今は「札幌市森林基本方針」としていて、「森林」基本方針として「林業」基本方針とはしていない。札幌市の場合は林業になっているのか、なっていないのか、わからない。森林となると、木材利用などの分野がわかりづらいので、「森林・林業基本方針」のほうがいいのか、それとも林業というにはまだまだおこがましいというのか、どこから林業なのかよくわからない。

【柿澤委員】林業自体が何か定義があるわけじゃないので。大規模な木材生産をするのが林業なのか、森林の利活用をするのが林業なのか。自伐型林業って言っているぐらいなので、そんなに大がかりじゃなくても一つの森林に対して人間が働きかけをして、それを何らかの形に利活用するというのが林業という風にいうのであれば、立派な林業なので。そのあたりをどのあたりの思いを込めるのか、その言葉に関してどういう思いを込めましたと説明できればいいのではないかなと。
【久保職員】林業って、ちゃんと材出して、収益上げて、というイメージがあるので、そこまでじゃないよねという気もしていた。
【柿澤委員】言葉をつくればいいのでは。他の自治体の基本計画など、名前を確認してみたらよい。
【上田係長】以前、内部で廃案にした「森づくり」の言葉がちょうどしっくりくるかもしれない。
【柿澤委員】そっちのほうが幅広いかもしれない。木材利用も入っていますしね。
【久保職員】幅が広いので、自然歩道とか利用の話も合っている。
【柿澤委員】確かに森林基本方針というと、逆に狭く感じるかもしれない。人によってとらえ方はちがうと思うが。
【上田係長】考えてみて、第３回や第４回の会議で改めて聞くと思う。

【上田係長】先日、熊本市に出張してきた。出張の主目的は広葉樹のセンダン施業の視察や他事業種参入の補助確認しにいったのだが、せっかくなので同じ政令市の熊本市と意見交換を行った。同じような悩みを抱えていたり、熊本市では体制強化が成功していたりして、参考になった。政令市同士の意見交換が重要だと思ったが、ほかに注目すべき他都市（政令市以外でも）の事例とかあるか？－
【柿澤委員】横浜市は、どちらかというと里山、都市内のところを市民と一緒にやっていて、市民との関係の作り方だとかに関して参考になる。静岡市は林業の市。大阪府はもともと森林ボランティアと一緒にやっていて、大阪府内はそれなりに林業的なことや森林保全もやっている。相模原市はビジョン作っていますね。広域合併して、山あいの森林地域を広大に抱えて、それで森づくり計画みたいなものを作っていて。多分森林環境譲与税もそれなりに、人口も森もそれなりに多い。
【上田係長】
相模原市は林業担当の職員数も令和３年度になって増えている。
【柿澤委員】
都市近郊の自治体の情報がよいかもしれない。政令市じゃなくて、中小都市のほうが例としてあるかもしれない。政令市だと大きいので。都市近郊の森林がそれなりに多い都市のほう

が近いかもしれない。道内では旭川市とか、林業やっていて、公園的なところや林業的なところや、木質バイオマスを地域で活用するだとかやっている。旭川市では、突哨山の指定管理をしているNPOが、市有林を整備して、そこから出た薪を市の施設で使うという地域循環を行っていた。そういう事例もある。帯広市はもともと市民の森があって、林業のほうもやっている。道内の少し規模が大きな都市と情報交換するのもよいかも。

【上田係長】いただいたご意見をもとに、第3回会議に向けて案を作る形になる。タイトなスケジュールなので、第3回のときもまだ検討中という状態かもしれない。また、緑の審議会から意見がでた生物多様性のほうの先生への聞き取りも段取りが出来ていないので、緑の審議会までに間に合わせたい。
【柿澤委員】市の職員の増員が必要な状況と感じる。